上高井教育会報

第156号
発行所　上高井教育会
発行人　上高井教育会長　小林　謙三
編集人　会報編集委員長　黒岩幹夫
印刷所　須坂新聞社

同好会の望ましいあり方

～同好会々員に望む～

同好会副会長　西沢　享良

「う～ん、来ないんだよな。どうしてなのかな？」「やー、よかったよ。大勢集まったし、内容もよかったよ。」など、夏休みの同好会について、職員室のあちこちで話題になっていました。それぞれの同好会の夏期講習会はどうだったでしょうか。

本年度の活動も半ばが過ぎ後半に入りました。そこで、さらに充実した活動にしていただくために、同好会について少し述べさせていただきます。

同好会のあり方や意義については、先生方は十分に承知かと思います。今更、何をと思われるかもしれませんが、一部の同好会を除いて出席率がよくない、活動が低調である等の声を耳にすることが多くなりました。そこで、一緒に考えていただければと思います。

例年の反省で「出席者が少ない、出席者が固定しがちである。」「同好会への加入者が少ない。しかも出席率が低い。関心に乏しく会員の固定化傾向がみられる。」等、気がかりな点がいくつか指摘されています。

「同好会の望ましいあり方」これは、なかなかむずかしいことですが、わたくしなりに、願いをこめながら思いつくまま記してみたいと思います。

まず第一に、教育会事業ならびに運営の「同好会運営」では「同好会は教育会の同好の士が集まって会員相互の資質向上をはかることを目的とする。」「同好会の運営は会員の自発的、継続的な活動により深めていくものである。」としています。

上高井の教育会は同好会での研修の場を大事にしています。また、これまで多くの先輩の方々がすばらしい実践を残されてきています。これらを引き継ぎ、さらに創造的な活動をし、一層の充実と発展をさせたいものです。そして、専門職としての力量と資質を高め、感性を豊かにしたいものです。

第二には、教師としての研修基盤となるものは、なんといっても自己研修です。しかし、いつでもできるとか、つい忙しさに追われたり、心の弱さに負けておろそかになるものです。

同好会は同好の士が集まり、お互いのもっているものを出し合い、励まし支えあって研修を深めていく場です。そして、自己の研修をさらに深めていくところです。

第三に、教職における専門領域はもちろんのこと、趣味・特技を大事にして生涯学び続けられるものを持つことが大切です。

教職を退いた後、さらに学び、求め続けていけるものを持ちたいものです。同好会で共に学び、研修する中で、確かなものにしていけたらと願います。

同好会は自発的な研修です。他からとやかく言われて行うものではありませんが、しかし、人間には弱さがあります。互いに声を掛け合って多数の会員が参加できるようにしていただきたいと思います。

同好会の運営の中に「会員は欠席の場合は、各同好会の世話係または会長にその旨を連絡する。」となっています。電話でよいので、ぜひ実行しましょう。

本年度は十五の同好会で、延べ人数は二百九十四名です。これだけの会員の一人ひとりが自ら積極的に参加し活動したら、すばらしい成果を上げることができることと思います。向学の気風に満ちた教師集団になり、児童・生徒の範になれると思います。

このように書いている私も仕事にかこつけ、出席していないのが実状です。これを機会に努力したいと思います。

各同好会のいよいよの発展・充実と活性化を期待しております。

（墨坂中）

上高井教育会だより

7・5　第４回常任委員会
7・7　第１回研究委員会
7・12　教研集会分科会長・司会者会　於教育会館
7・29　教育七団体結成会　於教育会館
8・25　教育七団体代表者会　於教育会館
8・30　教育七団体代表者、市内四高等学校へ陳情
9・1　第５回常任委員会
9・2　研究集会中間連絡会　於教育会館
9・6　教育七団体代表者、県知事・県教委へ陳情
9・9　第５回代議員会・信教各種研究調査編集委員中間報告会(1)

須高の山と川①

信仰の山　四阿山

青木廣安

トップには須高地方で最高峰の四阿山（あづまやさん）をとりあげてみた。

四阿山は標高二、三三二㍍。小布施町の千曲川沿いが約三二九㍍、その比高は約二、〇〇〇㍍になる。山頂は須坂市と真田町、そして群馬県吾妻郡嬬恋村との国界をなす。

須坂市街からは根子岳の陰になって見えない。高畑や小布施では根子岳の左奥に尖峰が望める。

四阿山と根子岳の南西麓はみごとな成層火山のスロープで、一帯は菅平高原と呼ばれる。須坂市側の深い急崖は四阿山系火山体のカルデラ壁である。根子・四阿・浦倉・奇妙山の外輪山を結ぶ大カルデラは直径三・五㌔ある。

カルデラ内の沢水が根子岳から不動沢、四阿山から権現沢、浦倉から大黒沢が流出し米子瀑布となる。合流して百々川の源流米子川になる。

四阿山は上小地方での古くからの信仰の山である。春先上田東部から神川の谷奥に望む四阿山の尖峰は白くけだかい。『信府統記』に「加賀白山権現ヲ勧誘」とあり、この地方で一番長く冠雪している四阿山はまさに白山そのものである。その山体から流出する沢川を集めた川が神の御手洗、〝神川〟である。

四阿山の名の起こりは日本武尊にさかのぼる〝あづま〟といわれ「吾妻山」とも書かれる。群馬県側には武尊伝説が多く、吾妻川・吾妻郡・嬬恋村もそれに端を発している。山頂に日本武尊命と白山姫命の石祠があり、嬬恋村方面と真田町一帯が氏子圏である。

須高では四阿山を背景にした米子不動尊を中心に修験の行場としての関係が深い。

▲上　須坂市から望む　▲下　真田から望む

夏期研修で学んだこと

道徳教育の基

西澤　朋子

信濃教育会研究調査部主任木下陸奥先生から道徳教育の基になるものを、先生の生き方や実践を通してのお話から学ばせていただきました。

先生から道徳の研究委員会で四年間ご指導をいただきました。その中でも、お聞きできなかったお話を聞くことができました。

先生が昭和三十八年、はじめてM小学校で道徳の研究授業をされ、吉岡正幸先生からご指導を受けたことが道徳教育をやられる出発点になられたそうです。

それから中学校の先生をやられる中で、実践を積み重ねられました。また、校長先生になられ、全校朝会などで生徒に語られた話は、ご自身の生い立ちや学徒動員で朝鮮に渡り、終戦を迎え、日本に帰って来た話等、先生のたどられた生き方を語られたそうです。『人みな罪ある人間である』という思いが常に心の奥にあるそうです。

「道徳指導事例集」（信教出版）の冒頭にある、ひとりの生徒が教師に宛てて差し出した手紙を紹介します。

×　×

そのことが、先生の生き方の支えになっています。

I中学校時代、一人の生徒に先生が関わられた話に心を打たれました。その生徒は木下先生と一緒にトイレそうじや玄関そうじ等をやりながら心を開き、素直な気持ちになっていきました。子どもの行為のよさを大切にしながら、体験を通し、知らせていったのです。

先生の話されることば一つ一つが温かみがあり、胸にしみこみました。

有意義な一日を過ごさせていただき、道徳同好会に感謝いたします。

（井上小）

「先生お元気ですか、僕は3月から印刷工の見習いとして勤めています。中学校を卒業してもう3年も経ったのです。アッと言う間でした。僕は中学校を卒業してから6回も職を変えました。卒業してすぐ勤めた会社は、3ヵ月もしないで辞めてしまい、それから、ダンプの助手、ガソリンスタンドの店員や喫茶店のボーイなど色々やりましたが、みんな長続きしませんでした。そんな僕がなぜ印刷工の見習いなどやることにしたのか、それは、先生が中学校時代によく言っていた「人間としての誇り」を持って生きたかったからです。何時までもいい加減なことをしていたら自分は一体どんな人間になってしまうのかと、とても不安になったのです。一人前の人間として誇りを持って生きて行きたいのです。

僕は先生にも随分迷惑を掛けた悪でしたが、最近になって何か急に道徳の授業が懐かしく思い出されてくるのです。3年の時、先生のクラスになって道徳を随分教わりました。その時配ってくれた資料は、いまでもファイルにしてとってあります。特に良いのは「足袋の季節」や「最後の一葉」や「お月さんが見ている」です。いま読んでもジーンときます。英語や数学などはほとんど忘れてしまいましたが、道徳で習ったことは今でも覚えています。先生は、道徳の時間に「人間は弱いものでついいい加減になってしまう。しかし、決して、それに満足している人間はいない、どんな悪でもできれば何とかもっとよい人間になりたい、みんなに信頼されたいと心の底で願っているものだ」というようなことを言われました。

その時、僕は悪だったのでとても心に響き、今の俺のことを言っていると思いました。社会へ出て色々やってみると、自分がしっかりすることとやるしかないということが分かりました。

道徳でやったことが今とても大事だということが分かります。道徳でやったことは、社会へ出てみると本当にその通りです。今まで色々好き勝手にやってきたけれど、最近になって、一体僕は何の価値がある人間なのかと考えました。色々職を変えてもうまくいかない、何か心のなか……

己に求める人達

吉田　悟

五月四日・五日に東日本部落解放研究所教育部会の現地学習があると聞いて、島田一生先生につれられて参加させてもらった。

参加者は五十五名であったが、東京・千葉・埼玉・群馬・長野・新潟と関東各県から、保母・教師・市役所職員・組合執行委員・看護婦・元教師・大学院生・大学教授等多彩な職種の人々の集まりであった。

第一日目には、東葛飾の被差別部落の婦人の話。

「私が自分の出身について話すために今日ここに来ることは、近所にも友達にも夫にさえも話せませんでした。」と語り始め、

個人的にはよく挨拶してくれるのに街で会うと横を向いて絶対に挨拶しない社長。

井戸水が枯れたので水をもらいに行ったらポンプの柄をひもでしばってしまった人。

踊りの時手の不自由な人の帯をしめてやろうとしたらさっと逃げて他の人にしめてもらっていたこと。

お寺のお茶当番を二人でやるのに私と一緒になった人は三年間一度も来なかった。

フィリピンから嫁をもらったが部落からもらうよりはいいと言った人。等々、今でも日常的に差別され「ここでは昔からそうだ。」と堂々と言われる現実。今だにこんな事がと驚くばかりでした。

関宿高校教師鈴木康彦さんのことばにも心打たれました。

「個人の人格、人間性、そしてその有り様を変革することは一生の仕事となるべきもの

美術同好会

宮下　正己

今年が第何回目の夏期講習会になるのか判らなくなってしまった私です。最初に参加させていただいたのは、いつだったのか。教員になってからではあるが、この夏休み中の裸婦講習会だけはと、自分にとって大事な絵を描く機会と思う。そしてそれは大仕事となろう。部落の高校生と係わり、その周辺と係わり、その被差別の痛みを共有するところから始めてきた私の取り組みも正直言って決して楽な道ではなかった。　以下略」

学校で授業をやるだけでは本当にこの子達とふれあえない。人として、この子の痛みを理解していくこととはどういうことか。鈴木先生の実践の重さを痛切に感じました。

八月八日・九日に新潟県高等学校教職員組合同和教育推進委員が新潟県各地から自家用車で須坂市に現地学習に来られました。授業に役立てるためには先進地？長野に学ぼうということだそうです。

この二つの研修会で思う事。担任だから、教科で扱うから、同推教員だから同和教育をやる、という人たちでないこと。

人として、教師として、己に求めてやまない熱情。自分の心に正直に生きようとする輝やける人達がいるんだなあという感動でありました。

（高山中）

としてきた。自分が絵を描けさえすればそれでよかったし、楽しかったが……。

福井敬一先生のご指導は、遂に本年のみで終了ということになってしまった。自分の思いから言うと、福井先生と福井先生を慕って集った諸先生を中心とする先輩方が築き上げた裸婦講習会である。ここ数年は同好会長を任され、自分で描くこと以外の勉強もする機会となった。福井先生ともモデルさんとも、そして、何人もの先生方、先輩の方々のその人なりに、今まで以上に接することができありがたく思います。

講習会では「水彩画のように描くね。油絵なのだから…。」と言われた時もあった。「水彩画のようだ。」とは、今は分かったように思うし、そのつもりで描いている。油絵を油絵のように描けるようになっているだろう今は。「明暗でなく色で見よう。」とも言われたことがあった。「明暗を明暗として描くのではなく」と言うことのように思う。もともと光の方向を意識して描くことに無頓着であったので、そのままの描き方で良さそうであったが、それで、光の方向というか明暗を意識して、しかも、明暗を描かないようにしてみる。すると、色がよく強くというか輝いて見えるように思っています。

「今年は色を無くして描いてみよう。」と課題を与えられたこともあった。描き進めて分かったのだが、モノクロームで描くのが課題ではなかった。「自分の描き方で自分を見てみよう。」が課題だった。形のみとり方が、またひとつ確実にしようとした結果が、さらに色彩を豊富にしてくれるのである。本年はというとF20のキャンバスにF30に描くように描くことができた。簡単なことであったが、今まで出来なかった。「画面が小さくなれば絵が小さくなる。」は当たり前じゃなかった。

幸いにも私は、福井先生最後の講習会の今年も三日間とも参加できました。終了時の講評会では、全員の作品を一点一点その人の良さというか、作品よりもその人について語る講評であった。「作品よりも」は不正確な言い方かな、作品と人がぴったり重なってみておられる先生でした。

「お互いが講師です。上高井美術同好会会講習会を続け益々研鑽されますように…。」とごあいさつされました。講師として最初に当地にみえたのは昭和28年だそうです。メセナホールの緞帳もそうですが、8点もの大作・代表作がこの上高井にあるのだそうです。40年もの長い間のご指導に感謝申し上げながら、来年の夏期裸婦講習会の盛会、成功を期したいと思います。

（小布施中）

洋上研修に参加して

中沢　敦子

この夏、十泊十一日の日程で、初任者洋上研修に参加させていただきました。友人の勧めもあって参加を希望したものの、船上での十日間という日程を思うと、正直なところ気が重い船出でした。しかし、実際研修に入ると、講義・講話、レクリエーション指導、ミーティング、寄港地活動といった盛りだくさんの研修内容と豪華な食事（？）で気の重さは消えました。私はその中でも、レク活動とミーティングがとても心に残っています。

レク指導は、ダンスとゲームがありました。運動不足になると思われた船上で、子どものように胸をときめかせ、汗をたっぷりかいて励んだ「ウイ・アー・ザ・チャンプ」のダンス、すり傷やあざをつくりながらのゲームは、担任をしている子供たちを思い浮かべながら取り組みました。講師の先生の、集団を魅きつける力に驚くと同時に、リーダーの力の大切さを学びました。

ミーティングは、最終日の研究発表会に向けて、一チーム四十数名で進められました。私のチームは、「自然と人間」というテーマで、子どもを自然と関わらせていくときの教師の姿勢について話し合いました。日頃から関心を寄せていたテーマだったので、各自の実践例を交換し、自分の考えを確かなものにできたことは収穫でした。

この研修の目玉となるはずだった寄港地・沖縄での活動が、台風の影響で大幅に短縮されたことを除けば、十日間はとても有意義でした。十一道県市から集まった仲間、そして文部省のスタッフ、船の乗組員の方々のあたたかさから、人の関わりのありようも学んだ旅でした。

今回の貴重な経験を忘れることなく、それぞれの地で仲間ががんばっていることを励みにし、子どもたちとぶつかっていきたいと思います。

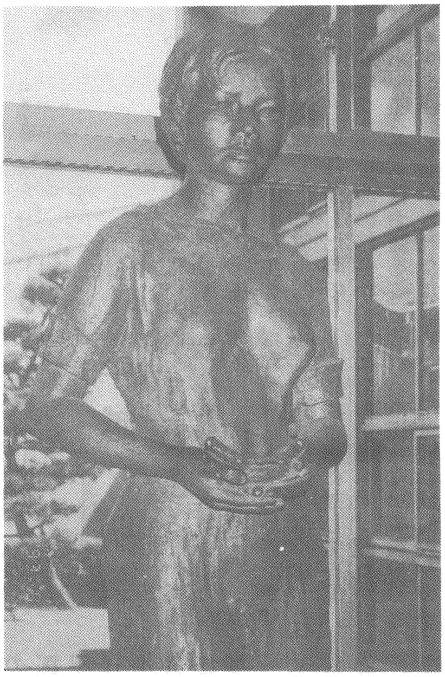
終わりに、このような研修の機会を与えてくださった、県教育委員会、校長先生をはじめ、関係の方々に厚くお礼申し上げます。

（高山小）

本校の宝 ②

「源」

高山小学校



海抜五三七㍍、松川扇状地の高台にある高山小学校は開校十六年目を迎えている。西方には北信五岳、遠く北アルプスの美しき姿を仰ぎ見ることのできる校舎。階段の昇降口を上る子ども達の目に映るのは黒光りし、一点を優しくも、しっかりと見つめるブロンズの少女像である。

この像を「源」と呼ぶ。製作者は地元出身の彫刻家小山純夫先生。昭和五十三年、当時の奥山田小、山田小、高井小の三校が合併し、新しく村立高山小学校が開校された時初代校長、米山理校長先生の「豊かな情操を基底とする創造的主体の育成」を教育目標に、新しい学校づくりに、地域の多くの人々が協力、その中での記念の一つである。

子ども達が未来に向かって夢を大きく、そしてはばたき、故郷に、日本に、世界に貢献する人になって欲しい願いが込められている。

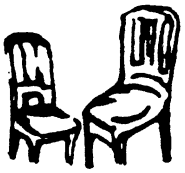
本校には、他に旧奥山田小、山田、高井の各学校に植えられていた、イチイ、カシ、ヒバ、ホオ、ヤツデ等の樹木の育つ「思い出の庭」がある。親や祖父母が思い出を懐かしみ、それぞれの地域で生きる自覚、先輩への敬いの念を育む場となっている。

また校庭には高山地方特育の、紅色の濃い見事な花の咲き競う山桜が植えられている。その花の下での給食や写生は子ども達の楽しみである。

全校の子ども達が心一つに仲良く協力し合って生きる人になって欲しい願いから設置されたランチルーム、錦鯉が泳ぎ、ドウダンツツジやカエデ、緑の芝生のある憩いの広場も、本校の宝物である。

（石井光男）

火ばち談義



今、パワー全開

宮下　紀子

八月二十八日のＰＴＡバレーボール大会の日。クラスの子ども達が大急ぎで作ってくれた摸造紙の応援旗が、体育館に飾られていました。その真ん中に、『宮下パワー全開』とありました。学生の頃、相手コートにサーブが入れば上出来と言われた私ですから、子ども達だって、私のバレーボールの技術に期待しているわけもないのです。それでも『宮下パワー』なのです。

私がこのクラスを担任したばかりの頃、なにか行事があるたびにお天気を心配する子ども達に、「先生が行く時はいつも晴れるよ。大丈夫！」と力強く言ってしまったのです。（実際、それまでの私はあまり雨に降られなかったのです。）三年生だった子ども達は、私の言葉に安心したようでした。そして、遠足の途中、天気があやしくなると、「先生の力が足りない。」とか「先生、パワー出して雲をなくしてよ。」という子ども達の声が起こるようになっていました。遠足の帰り道、大粒の雨に打たれたこともあるし、社会見学でお弁当を食べている最中に降られたこともあるのに、なぜか『宮下パワー』は私の予想をはるかに超えた大きな力になって、子ども達の中に残っていきました。雨に降られた時などは、「先生、今日は疲れていたんじゃないの？」「雨の方がパワー強かったね。」などと慰めの言葉までかけられるのです。

煽てに乗りやすい私は、すっかりその気になって、『宮下パワー』でクラスを盛りたてようとしていました。

驚いたのは、育休明け。五年生になった子ども達の口から『宮下パワー』を再び聞いたのです。大して当てにならないパワーでも、子ども達は覚えていてくれました。この時から『宮下パワー』は、子ども達から私へ励ましの声に変わったのです。私は今、子ども達のパワーに支えられています。（バレーボール？もちろん優勝です。）（日野小）

中国を訪れて

牛越　明美

「生水は絶対に飲んではいけません。」これが八月三日～九日まで小学生六人、中学生十三人と共に須坂市児童生徒訪中団の一団員として、中国吉林省四平市を訪問した時の約束事だった。事前の打合わせから「水を飲めばお腹をこわす」と何度も聞かされたためか、行きの中国航空の機内食についた水でさえ「これは飲んでいいの？」と聞いてくる。「飲料水」と書かれた水でさえ、子ども達の不安そうな顔を見ると、海外旅行が初めての私も自信がなくなった。

これほど水に対し気を配ったにもかかわらず、疲れか、それとも慣れない御馳走のためか、四日目には何人かの子どもが下痢をした。知らない土地で病気になると心細いものだ。そんな時、四平市の女医さんの笑顔に救われた。四平市に滞在中、ずっと私たちに付き添っていただいた方でホテルでやさしく、丁寧に診察してくださった。診察は、日本の医者とあまり変わりがなく、正直なところ、ほっと一安心した。さらに、「この後も同じような症状の人がでるかもしれないから。」と言い、薬を一瓶くださった。

この後、帰国までの間、私をはじめ何人がこの薬のお世話になったことか…。

今回の訪中は、単なる海外旅行ではなかったので、一般のツアーでは味わうことのできない貴重な旅になった。たくさんの方々が親切にしてくださり、中国の人の素朴な面や、やさしさに触れ、私の中のあったイメージが変わり、とても好きになった。

訪中前、何人かの方から、「中国は一度訪れると、再び行ってみたくなる国」と聞かされていた。私も今はこの気持ちがよくわかる。機会があれば、今度は中国語を勉強して再び中国を訪問してみたいと思う。（高甫小）

大切なもの

宮下　秀和

先般、小林会長先生から、「出逢いを大切にしたい」とのお便りを頂戴した。十年ぶりにお会いし、ありがたくもずいぶんと懐かしく感じた。出逢い、偶然の出逢い、故意の出逢い、いろいろあるが、これも全てご縁と言うか、ご縁があったという一言に尽きるのではないかと思う。そういえば、新卒の時の校長先生がかつて『人間は深くありがたい縁によって生かされている存在である。』と色紙に書いて下さったことがある。きっと、いろいろな思いがよぎっておられてこの言葉を書いてくださったに違いない。

『深くありがたい縁によって生かされている存在』それが私どもであるという言葉は強く私の胸を打つのであった。教師になって十二人の校長先生に教えを受けてきた。新卒の時の校長先生とはたった一年間ご一緒頂けただけであったが、しかし、私にとっては最も印象深く、我師と仰ぐ校長先生である。二十年を経た現在でも尚親しくご指導頂けるのも本当にありがたいご縁であると感謝している。今年七十七歳になられるかと思うが、お元気で現職の頃と全然変わらない。ご縁を思い出しながら当時を綴ってみたい。

旧飯山藩士族の古武士然とされた校長先生であった。人情家で感きわまると大粒の涙をはらはらと流された。卒業式、あるいは離任式の時などはことさらに大粒の涙を流されるのであった。校長講話、卒業式、新年会、送別会、歓迎会等々には、万葉集などから古歌や漢詩などを万感の思いを込めて歌われるのが常であった。

よく覚えているのは卒業式の学校長式辞の中で石川啄木の「故郷の山に向かいて言う事なし故郷の山は有り難きかな」を朗々と歌われ、大粒の涙をこぼされたことである。また、酔いが回ると「義理が廃ればこの世は闇だ」と『人生劇場』を歌われるのが常であった。

焦らず、慌てず、ご縁を、出逢いを大切にしていきたいと思う。（相森中）

編集後記

本来の夏空を見ることもないまま、今年の夏が終わってしまったような気も致します。

無理なお願いにもかかわらず、お忙しい中、原稿をお寄せ下さった先生方、本当にありがとうございました。

本号から、高山中学校の青木廣安先生にご執筆いただき「須高の山と川」を掲載することになりました。

何げなく見ている山、接している川を改めて見直すと同時に、初めて知ることも数多くあることと思います。

郷土の山・川を愛することのできる子供を育てるためには、まず教師が知ることが大事だと思います。その一つの資料としてご活用いただければ幸いです。（小山・石田）